

ルカ福音書16章の不正な管理人のたとえ

ルカ福音書16章の不正な管理人のたとえについてです。これは弟子たちに向けた話で、一つ前の放蕩息子のたとえはパリサイ人に対しての話でした。放蕩息子は父のあわれみを確信して行動し、不正な管理人は、余計に負債を赦されたものは余計に愛するものだという、小作人のあわれみを確信して行動しました。

私の解釈は、一般的な解釈とは異なっています。「不正の富」というと富を不正に使うことと思われず。「不正な管理人」が管理を正しく行わない人だといのと同じです。「不正のマモン」というと、マモンが良い富という意味ではなく、欲望や富が擬人化された表現だと見ると、欲望に対して不正である、つまり、欲望を第一にするのか、神を第一にするのかを問われている話です。欲望を捨てることと自分の富で施しをすることが同様のこととして教えられています。

OpenAI o1

おっしゃるように、「不正のマモン」をめぐるご解釈には、伝統的に「この世の富は不義に用いられやすい（だから正しく用いなさい）」という読み方が多い一方で、「マモンへの“忠実さ”から意図的に離れる（不忠実=不正）ことを選び、神を第一にする」という視点を取る解釈も可能だと思います。とくにマモン（富・欲望）の擬人化を認めるならば、「マモンに忠実であろうとする姿勢」を断ち切るこそイエスの教えだ、と読むことに大きな意味があります。

以下では、その解釈のポイントを改めて整理してみます。

1. 「不正のマモン」を「マモンへの不忠実さ」と読む視点

1-1. 従来の理解：「この世の富は不義に用いられやすい」

一般的には、ギリシャ語原文 “μαμωνᾶς τῆς ἀδικίας (mamōnas tēs adikias)” を「不正（不義）の富」と訳し、

- この世の富はしばしば不正・不義に傾きやすい
- （だから）その富を施しという良い行いに用いて、神の国に目を向けよ

と説かれることが多いです。

1-2. あなたの解釈：「マモンに対して“不正”であれ」

一方で「不正」(ἀδικία) の対象を「マモンに対して」という視点に転換すると、

- マモン（富・欲望）を第一に仕えることに対して、不正・不忠実であれ
- すなわち、富の誘惑や欲望に対しては“忠実な管理人”ではなく、むしろ思い切って“裏切る”態度を取りなさい

となります。すでにご指摘のように、「富を施すこと」と「欲望を捨てること」が同じ方向を指す教えになるわけです。

2. 「不正な管理人」と並行して考える

2-1. 「不正な管理人」とは何か

- ルカ16:1-8の管理人は、主人の財産（マモン）を浪費し、なおかつ借金を減らすことで他人（小作人）に施し（あるいは恩を与える）を行いました。
- 普通の価値観では“管理を正しく行っていない”（主人とマモンに“忠実”ではない）ため、「不正（不義）の管理人」と呼ばれます。

2-2. 管理人とマモンの関係を逆手に取る

- マモンを大切に守るのが「正しい管理人」なら、減額して施すのは「不正な管理」になる。
- しかしイエスは、その裏切り行為（施し）に一種の「先見の明」を見出し、「友をつくる」ことに賢さがあったとされる（16:8-9）。
- つまり「マモンに（あえて）不忠実である」ことが、神の国の価値観では逆に“先を見越している行為”とされます。

ここに、「マモンに対して忠実であろうとしない（＝不正・不忠実である）」あり方をイエスが肯定的に取り上げている、という読み方が成り立ちます。

3. 「マモンを擬人化する」視点が有効な理由

3-1. マモンへの仕え方を問う文脈

ルカ16:13の「あなたがたは神にも仕え、マモンにも仕えることはできない」という言葉は、マモンを擬人的に「ご主人様」として描いています。ここでマモンは単なる「お金」そのものというより、「人生の主人・拝む対象」にまで高められた偶像として扱われています。

3-2. 「忠実か、不忠実か」の二者択一

イエスは「どちらか一方を選ばねばならない」とラディカルな形で問いかけますが、まさにマモンを一種の“主”として拝む世界においては、「マモンに忠実に仕えるか、神に忠実に仕えるか」の選択が迫られます。したがって、マモンを“いとおしんで集める（忠実に守る）”のではなく、あえて“捨ててしまう（施す）”ことで、結果的に神を第一にするという構図が浮かび上がります。

4. まとめと意義

- 伝統的な解釈では、「不正のマモン＝不義に傾きやすい富」をどう用いるか、というモラル的な話に焦点が当たりがち。
- あなたの提示される解釈では、それをさらに一歩進めて、「マモンという偶像からの解放」や「欲望に仕える体制への不忠実さ」という面に光が当たる。

こう見ると、「不正のマモン」であれ、「不正な管理人」であれ、いずれも「神に仕える」ことと「欲望（マモン）に仕える」こととの対立を描き、後者から脱却するよう招く譬えとして再解釈できるわけです。

4-1. 欲望を第一にしない生き方

- 施しをすることは、欲望（貯めたい・守りたい）に忠実でいる生き方をあえて裏切る行為。
- その「マモンに不忠実」な態度こそが、最終的に「神に忠実である」姿勢へと導く。

4-2. “神を第一にする”ための逆説的手段

- 世から見ると「不正」「もったいない」と映るような行為（富を施す）こそ、神の国の論理からすれば「先を見越した賢い行動」。
- それはまさに「偽りの支配（マモンを主として依存する考え方）」から自由になることでもある。

最後に

「不正のマモン」を「マモンという偶像への不忠実さ」と解釈する視点は、ルカ16章のパラドクス（逆説）をいっそう鮮明にしてくれる興味深いアプローチだと思います。

- 「マモンを守る＝正しい」と思われる常識を逆転させ、
- 「マモンに不忠実（手放し、施す）＝むしろ神の前では正しい」

というイエスのラディカルなメッセージを浮き彫りにするからです。

実際にルカ福音書は「神の前で高ぶる者を低くし、へりくだる者を高める」という逆転のテーマをあちこちで取り上げます。そうした文脈でも、「富を捨てる・貧しい人に与える」ことが神の国における富となる――この大きな逆説が貫かれていると見ると、非常に説得力があるでしょう。

「私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。」を教えるたとえです。

OpenAI o1

ここまでの文脈（ルカ16章「不正な管理人」のたとえ）に加えて、「私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します」（ルカ11:4）という主の祈りの一節をあわせて考えると、“罪”と“負債”が重ねられる聖書的イメージが見えてきます。とくにルカ福音書では、借金（負債）を“罪”の比喩として扱う傾向が強く、「不正な管理人」が他者の負債を減免する行為は、主の祈りにある「私たちも負い目のある者を赦します」の生きた例として読むことができます。

1. 罪＝負債のイメージ：ルカの特徴

1-1. ルカ11:4 「私たちに負い目のある者」

- ルカ版の主の祈りでは、マタイ6:12の「私たちに負債のある者（ὀφειλέται）」が「私たちに罪を犯す者（ἀμαρτίας）」に言い換えられつつ、さらに「負い目（ὀφειλή, debt）」という表現も加えられています（写本により異同はありますが、ルカは「罪」と「負い目」を両方用いられることが多い）。
- ここから、人との間の罪＝借金のように返済を要するものという観念が表され、赦すことが「負債を帳消しにしてあげる」行為として描かれます。

1-2. 負債の赦しは神の赦しのモデル

- ルカ7:41-43の「五〇デナリと五〇〇デナリを負う二人の借金人をいっぺんに赦した例え」でも、**借金を赦す=愛が生まれる**という構図が示されます。
- イエスが「多く赦された者は、多く愛する」（ルカ7:47）と語るように、負債が大きい人ほど赦された喜びは大きくなる、というルカ特有のパターンが繰り返し登場します。

2. 「不正な管理人」と“赦し”のモチーフ

2-1. 管理人が負債を減免する

不正な管理人（ルカ16:1-8）は、主人の財産を浪費したうえで解任されそうになり、**借金を負う人々の負債を減額（あるいは全額赦す）**ことで「恩を売り」、自分の将来を確保しようとしています。

- 借金のある人々にとっては、“思わぬ負債の帳消し”に驚き、同時に管理人への好意（愛着）が芽生えるでしょう。
- ここで用いられる動詞「減額する」「帳消しにする」は、実質的に「赦す（ἀφίημι）」と親和性が強く、イエスの語彙と重ね合わせると、「相手の負債を取り除く=赦す」行為が連想されます。

2-2. 主人（神）の目から見ると「不正」

たしかに、この管理人の行為は主人（神）に対しては「浪費・背任行為」であり「不正（ἀδικία）」とされますが、イエスは「**先を見越して行動した賢さ**」を取り上げています(16:8)。すなわち、

借金を減らしてもらった人々（＝“大きく赦された”者たち）は、管理人を好意的に迎え入れるようになる

という側面に注目し、「不正な管理人」を例にして「たとえ不純な動機であっても、人に“赦し”を与えれば、その相手との間に関係が芽生える」ことを示唆しているのです。ここには、「多く赦された者は多く愛する」というルカ7章の主題との共鳴があります。

3. 「主の祈り」と重なるメッセージ

3-1. 「負い目を赦します」＝「わたしも赦された」

主の祈り（ルカ11:4）は、「私たちの罪を赦してください。私たちも、負い目のある人を赦します」と祈るように教えています。これは**神による赦しを受け取りながら、自分も人を赦す**という、縦（神との関係）と横（人との関係）が相互に結びついた教えと理解できます。

- 「不正な管理人」はまさに、人の負債を帳消しにする（＝赦す）行為をしたことで、相手から好意を得る構図を描いています。
- ただし管理人の場合は“利己的な動機”でしたが、それでも「負い目を赦すこと」自体が、関係を回復する大きな力を持つことが示されています。

3-2. “減らす・赦す”が生む愛と喜び

放蕩息子（ルカ15章）も、父が何の見返りも求めずに「帰ってきた息子の負い目」を赦すことで、大きな喜びが生まれました。ルカ16章の“不正な管理人”でも、借金を減免してもらった小作人たちが、結果的に「管理人を迎え入れる」こととなります。

- これらはすべて、「**赦す（負債を減らす）**」という行為が新しい喜びと愛を生むルカ福音書の一貫したメッセージと言えます。
- 主の祈りの要約：「負い目を赦す」ことは、結果的に自分に返ってくる祝福でもある、という原則が実例を通して語られているわけです。

4. まとめ

1. ルカ独特の「罪＝負債」のイメージ

- 主の祈り（ルカ11:4）や、ルカ7:41-43の譬えなど、ルカ福音書では「負債を赦す」ことが「罪を赦す」イメージとして繰り返し描かれる。

2. 「不正な管理人」は、負債を減らす＝赦す行為で“友をつくる”

- 動機は不純でも、相手にとっての負担を軽くする「赦し」の行為は、愛・好意を得る大きな力になる。

3. 主の祈りと同じテーマ：自分も他者を赦すなら、神の赦しを実感する

- 「私たちの罪を赦してください。私たちも私たちに負い目のある者を赦します」という祈りに通じるように、**他者の負い目（罪・借金）を赦すことは、神の赦しのリアルな経験につながる。**

このように、不正な管理人の譬えは「**私たちに負い目のある者を赦す**」ことの力や意義を、少し皮肉交じりの形で示しており、主の祈りの教えを別の角度から“実例”として描いていると読むことができます。つまり、「**自分が負い目を赦されたからこそ、他者の負い目をも赦す**」という聖書全体の大きな流れがルカ16章にも表れているのです。

パリサイ人は、イエスのたとえを帰る者を受け入れる側、父に自分の立場を置いて、聞いていますが、あなた方は受け入れない兄であると訴えます。弟子たちは、イエスのたとえを小作人の側に自分を置いて聞いていますが、不正な管理人のようになれと教えます。

OpenAI o1

おっしゃるように、ルカ15章（放蕩息子のたとえ）から16章（不正な管理人のたとえ）にかけて、「誰がどの立場でこのたとえを聞いているか」という点が重要なカギになっています。実際、イエスはそれぞれの人々—パリサイ人、弟子たち、また罪人たち—が、自分をどのポジションに投影しているかを意識させながら語っているように見えます。

1. パリサイ人の聞き方：自分を“父”のように置いている

1-1. 放蕩息子のたとえへの聞き方

放蕩息子（ルカ15:11-32）のたとえ話で、イエスは「罪人や取税人を受け入れる神のあわれみ」を描きます。しかし、そこに居合わせたパリサイ人は、自分たちを「受け入れる側（父）」の位置に置いて理解しようとした、あるいは「実際にもっとも正しい場所に立っている」と考えがちでした。

- 彼らは、自分たちの“義”や“正しさ”を当然視し、あたかも人を受け入れる立場にあるかのように捉えます。
- しかしイエスは、むしろ彼らこそ“受け入れたがらない兄”であると指摘するのです（兄息子は父のあわれみが理解できず、弟の帰還を喜ばない）。

1-2. パリサイ人への批判

パリサイ人が「父親のように寛大な立場」にいるのではなく、“赦された喜び”を分かち合えない兄息子の姿こそが、彼らの本当の姿だ――イエスはそう訴えます。

- その結果、パリサイ人たちは、自分たちの偽善や赦しの欠如を暴かれ、不快に感じるわけです。
- ルカ16:14で「金好きなパリサイ人」がイエスをあざ笑ったのも、この延長線上にあると考えられます。

2. 弟子たちの聞き方：自分を“小作人”の立場に置いて聞く

2-1. 不正な管理人のたとえ

一方、ルカ16章に移ると、イエスは「弟子たちに対して」不正な管理人のたとえを語り始めます（16:1）。弟子たちは、パリサイ人とは違って、「返してもらい・受け入れる側」というよりも、「何かを受け取る側」、具体的には**主人の財産を分配されたり、負債を減免してもらい立場**に共感を寄せやすかった可能性があります。

- 小作人（借金を抱えた人）にとって、管理人が負債を減らしてくれるのは大変ありがたい行為。
- しかしその管理人は、主人から見ると「不正な管理」をしている。
- イエスはここで「打算的ではあっても、他者に施す（負債を減らす）という行為が、先を見越した賢い態度だ」と諭すわけです。

2-2. 弟子たちへの促し：「不正な管理人のようになれ」

「不正な管理人のようになれ」とは、もちろん「ずる賢く悪いことをしろ」という意味ではなく、「**地上の富や欲望を第一に守り立てるのではなく、思い切って“施し”に用い、それによって将来（神の国）を見越しなさい**」という逆説的メッセージです。

- 小作人の視点に立つと、負債を減らしてくれる“管理人”は「恩人」であり、そこには新しい関係と喜びが生まれます。
 - イエスは、神から託された富を“自己保身のためだけに使う”のではなく、“小作人＝貧しい人々”に施す方向へ積極的に切り替えることを勧めています。
 - その結果、「多く赦された者が多く愛する」（ルカ7:47）の原理が人間関係にも生まれ、神の国での真の報いにつながるというのが主旨です。
-

3. まとめと意義

1. パリサイ人

- つねに自分を“受け入れる側”“高い立場”に置きがち。
- しかし、イエスから見れば、むしろ「赦しを受け入れられない兄息子」の姿であり、実際は父のあわれみに近づけないでいる。

2. 弟子たち

- 自分を“小作人”や、時には“弱い立場”に重ね合わせることで、イエスのたとえを素直に受け止める。
- イエスは彼らに「不正な管理人のようになれ」と逆説的に語り、「地上的な利害や欲望に忠実であるうとするのをやめ、神の国を最優先にする使い方をしなさい」と示唆する。
- その結果、人への施しや負債の減免という行為が、赦しや感謝・愛を生む鍵となる。

こうして見れば、「どの立場に自分を置いて聞くか」がイエスのたとえを理解するうえで非常に重要だとわかります。パリサイ人はいつも「自分が正しい側」「人を迎える側」にいたいと思っ込んでしまい、実は“父のあわれみ”の心を理解できずにいます。一方、弟子たちは、罪人や小作人のように自分を置いているからこそ、イエスの「赦しと施しの力」に気づきやすいわけです。

このように、パリサイ人と弟子たち、それぞれが自分をどの登場人物に投影しているかによって、同じイエスのメッセージもまったく違う響きをもって受け取られるのです。

ザアカイは不正な管理人ですね

OpenAI o1

ルカ19章に登場する取税人ザアカイは、しばしば「不正な管理人」のたとえ（ルカ16章）と類似した構図で語られることがあります。ザアカイ自身は「管理人」という職名ではありませんが、以下のような点で「不正な管理人」と通じるテーマを見ることができます。

1. ザアカイと「不正」

1-1. 取税人の役割

ザアカイは「取税人のかしら」（ルカ19:2）として、多くのユダヤ人からは“罪人”とみなされていました。取税人はローマ帝国のために税金を徴収し、しばしば過剰に取り立てて自分の利得を得る——そうした行為が「不正」として非難されていたのです。

1-2. 「不正」の具体例

ザアカイが「もしだれかからだまし取ったことがあれば、四倍にして返します」（19:8）と言ったことから、実際に不正に取り立てを行っていた可能性が示唆されます。つまり、他人から不当に奪っていた（あるいは少なくとも、世間にはそう思われていた）という点で、「財産を正しく扱わない」管理人と同様の構図がありました。

2. 「不正な管理人」との類似点

2-1. 人々からの評判の悪さ

- **不正な管理人**（ルカ16章）は主人の財産を浪費し、さらに借金を減額して「抜け目のなさ」を発揮したため、周囲（主人）から見て「不正」「不義」です。
- **ザアカイ**はユダヤ社会から見れば「裏切り者」「罪人」と見なされ、実際に不当な徴収をしていたと本人も認めるような状態でした。

2-2. 富の扱いが鍵となる

- **不正な管理人**は、主人の財産を減額することで人々に恩を売り、“将来の備え”をしようとします。
- **ザアカイ**はイエスとの出会いを機に、自分の財産の半分を貧しい人々に施し、だまし取った分を四倍にして返すと宣言し、結果的に「将来（救い）」を得るきっかけになります。

つまり、どちらも「富の扱いが変わる」瞬間がポイントです。不正な管理人は打算的ではありますが「他者の負担を軽くする」行為で「友」を得ようとしますし、ザアカイはイエスの愛に応答して「不当な利益を捨てる」行為によって「救い」を得ます。

3. ザアカイに見る“悔い改め”と“救い”

3-1. 罪人が受け入れられるルカのテーマ

ルカ福音書はとくに「罪人とされる人々が、イエスによって赦され、受け入れられる」というテーマを強調します。ザアカイはその代表例です。イエスはザアカイの家に入り、「この人もアブラハムの子なのだ」と宣言されました（19:9）。

- 不正な管理人が（打算的な形であれ）“負債を減らす”という赦しの行為を象徴していたように、ザアカイも“他者の負担を軽くする”方向へ行動を変えていきます。
- このように、どちらも「お金に対する姿勢」の転換が、人間関係の回復や救いにつながっているのが共通点です。

3-2. “不正”からの方向転換

ザアカイの場合は、自ら不正の道に背を向け、イエスに応答して大きく生き方を変えました。その結果、「今日、この家に救いが来ました」（19:9）と宣言されるに至ります。

- 不正な管理人はたとえ話上、“主人の財産を勝手に減額する”という倫理的には複雑な行為をしますが、イエスはそこに「人を赦して負担を軽くする」ことの力を見せようとされました。
- ザアカイの行為は不当利益を手放し、むしろ人々に返す（“減額”ならぬ“返済”）ことで周りの人に赦しと和解を提示します。

4. まとめ

- ザアカイは「不正な管理人」に重ねて読める存在:

- 人々から見れば、どちらも「他人の財産を不正に扱う」と目される人物。
- しかし、イエスとの出会いを通し「富の捉え方」「周囲の人との関係」の方向を一変させる。

- **共通点は“富の扱い”と“赦し・回復”:**

- 不正な管理人は、利己的な動機ながらも「負債を減額」し、人々との関係を変える（＝赦しの力を実感させる）。
- ザアカイは「富を手放すこと」「だまし取った人々へ返済すること」で、神と人々の前に悔い改め、救いと回復を得る。

- **ルカ福音書が強調する逆転劇:**

- 罪人・取税人・不正な者と呼ばれていた人物こそ、イエスに出会って大きく人生を転換し、“神の恵み”にあずかる。
- これがルカ独特の「失われた者を探し求めて救う」(19:10) 福音の特徴です。

このように、ザアカイは“実在の不正な管理人”のような立場から出発しながら、最終的には「神の前に正しくされる」道へと導かれた人物と言えます。ルカ16章のたとえとあわせて読むと、「金銭をどう扱うか」「不正から悔い改めることで回復へ進む」ことがいかに重要かを、物語を通して生き生きと示しているのです。

パリサイ人には、主のあわれみ深さを教え、弟子たちには、隣人にあわれみを行うように教えます。悔い改めてあわれみを受けたものは、兄弟を愛するように励まします。

OpenAI o1

ルカ15章（放蕩息子のたとえ）と16章（不正な管理人のたとえ）をあわせて見ると、イエスはそれぞれの聞き手——パリサイ人と弟子たち——に異なる角度から「あわれみ」のメッセージを語っていることがわかります。

1. パリサイ人には、「主のあわれみ深さ」を示す

1-1. 放蕩息子のたとえ（ルカ15:11-32）

- **父のあわれみ:**

息子が財産を浪費して戻ってきたにもかかわらず、父親は走り寄って抱きしめ、盛大な宴会を開いて迎え入れます。そのあわれみは予想をはるかに超えるものでした。

- **兄息子の姿:**

ところが兄息子は、父が示す一方的なあわれみを素直に喜ばず、弟を受け入れようとしません。イエスは、この兄息子こそが、自らを「正しい人」と位置づけ、罪人を蔑視していたパリサイ人の姿に重なりと示唆しています。

- **パリサイ人へのメッセージ:**

自分を義とする者にとっては、主が罪人を受け入れるあわれみが理解しにくいかもしれないが、それが神の愛の本質だ、とイエスは教えます。

2. 弟子たちには、「隣人へのあわれみ」を実践するよう教える

2-1. 不正な管理人のたとえ（ルカ16:1-8）

- **負債を減らす“施し”：**
解雇寸前の管理人は、借金のある人々の負債を減らして自分に味方をつくろうとします。これは“打算”こそあれ、結果として「相手の負債を軽くする＝あわれみを示す」行為になりました。
- **隣人へのあわれみのすすめ：**
イエスは弟子たちに「あなたがたも、この世の富を欲望のままに貯めるのではなく、他者への施しに用いるならば、結果として永遠の住まいを得ることになる」と語ります(ルカ16:9)。
- **“赦す”ことが愛を生む：**
ルカ福音書が繰り返し強調するように、負債（＝罪）を大きく赦された者は、大きく愛するようになります（ルカ7:47）。他者への負債を減らすことによって、深い愛や喜びの関係が生まれるのです。

3. 悔い改めてあわれみを受けた者は、兄弟を愛するように励まされる

- **悔い改めと受容：**
放蕩息子が父のもとへ戻るように、悔い改めによって神のあわれみを受け取る者は、神の愛に生かされる新しい関係に招き入れられます。
- **隣人を赦す・愛する動機：**
主の祈り（ルカ11:4）にあるように、「私たちの罪を赦してください。私たちも、負い目のある者を赦します」と祈る者は、自分がまず赦された恵みを体験したからこそ、兄弟にもあわれみを示せるのです。
- **ルカ19章のザアカイ：**
実際に不正を働いていた取税人ザアカイは、イエスに受け入れられたことによって自発的に財産を手放し、不当な取り立て分を返済して和解を示します。これも「あわれみを受けた者」が具体的に隣人への愛に踏み出す好例と言えるでしょう。

4. まとめ

- **パリサイ人：**神のあわれみはどこまでも深く、悔い改める罪人を大いに歓び迎える。イエスは、それを受け入れられないパリサイ人に対して、「失われた者を求める神の愛」を再確認させようとする。
- **弟子たち：**“不正な管理人”の譬えを通し、神からの祝福（富）を自分のためだけではなく、隣人へのあわれみに用いるように教える。悔い改めてあわれみを受けた者は、同じように兄弟を愛し、負債を“赦す”行為を勧められている。

こうして、神のあわれみを知り、それを受け入れた者は、今度は隣人に対してあわれみを実践し、互いの関係に赦しと愛を生み出していく——ルカ福音書15-16章、そして全体を流れる大きなテーマがここにあります。

がんばろう

OpenAI o1

はい。ともに喜びを分かち合いながら、聖書に表される神のあわれみを学び、隣人への愛を実践する道を、一歩ずつ歩いていきましょう。がんばりましょう。